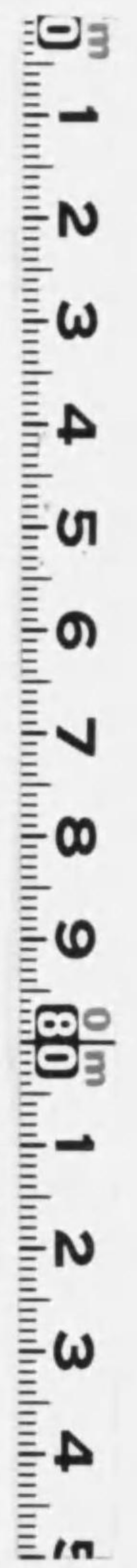




特252

480

趣味の北部東京案内



始



特 252
480



荒川堤觀櫻之圖

社 神子王



流の主名

はしがき

王子電氣軌道株式會社の創立三十周年に當り會社經營の電車及びバス路線に沿ひ探勝にも特に便利にして而も趣味饒かなる名勝史蹟を調査編輯し記念出版として會社關係者に頒布したるところ意外に好評を博したり。然るに偶々書肆よりこれを探勝案内記として更に廣く出版せむとの希望もあり、之を諾することゝしたり。或は調査研究の及ばざる處あるべきを恐るれども此の方面探勝の道しるべとなり懷古の資料とならば幸とする處なり。





飛鳥山の花盛の圖

趣味の北部東京案内

荒川を以て限られた東京の北部一帯は地域平坦、人口比較的稠密、事變下特に著しい發展振りである。王子電車、王電バスは此の區域交通の使命を負ひ、高度にまで實用化され、生活化され、沿線の人々に利用されて居る。

電車、バスを驅つて巡覽すれば大東京發展の姿は生きた名所として、知識の資料として眼前に展開し、而も沿線には遊覽場所、名所舊跡として探勝に値するものも尠くない。

今、大方諸賢を王子電車、王電バスに乗せて此の區域を御案内したいと思ふ。

飛鳥山の秋色



飛鳥山の雪



花の飛鳥山

飛鳥山は東京名所として世に著聞せられ、櫻の名所としては上野、向島と其の妍艶を競ひ、來る春毎に幾十萬の花客を吸集すること餘りにも有名である。されば今更、昭和の飛鳥山の説明よりも、寧ろ往時の有様を書き記し懷古探求の資とすることが一層の興味を添へる所以であらう。

此の山が飛鳥山と言はれるのは、後醍醐天皇の元亨年中に、豊島左衛門が飛鳥の祠を祀つてからだと言はれて居る。其の飛鳥の祠は寛永十年に王子權現の地内に移され、後に地主山或は地守山と呼ばれた小高い所が其の跡だと言ふ。此處はもと幕府が瀧野川村地頭、野間藤一郎政成に賜つた林地で、當時は樺などの丘陵であつたが、享保五年徳川吉宗、江戸城内吹上御苑から櫻苗二百七十本を移植せしめたのが「櫻」の始まりで、其の後十數年の間に増植された櫻は千本を超え樹も成長して、江戸官民の花見場所となり、水茶屋十軒の開店も許さ



春の飛鳥山

れるに至つた。櫻の成長するまでには徳川吉宗に随つて紀伊から江戸に下つて来た家臣松平専助が植林検分の役となり櫻の木々には「御用木櫻枝折るべからず」の制札を建てた程の愛育振りであつたといふ。吉宗は又、武を奨励し殊に郊外の遊獵が好きであつたから、自身と共に市民にも遊樂の境を興へようと心掛けたのであると言はれる。それから歴年此處の花見が盛んになり、吉宗も來遊し、扈從する學者、文人も將軍に共鳴して此の花と景とを賞し、林大學頭に「飛鳥山十二景詩」があれば、鳴鳥錦江撰文の飛鳥山碑があり、又かの有名な佐久間象山の櫻花賦碑もあり、此の二碑昭和の今日巍然として山上に残つて居る。元文三年二月には山下に水茶屋五十四軒、揚弓場などが設けられ、藤原勝行といふ風變りな老人が、短冊を賣つて居たといふ。同四年には勅使として下向した大納言冷泉爲久も此の櫻花を見て

折枝の色香を見ずばあすか山

花の所の春も知られじ

と詠を残して居る。寶曆から天明にかけて此處は益々繁昌し花も見事であつたが寛政、享和の頃に至つて漸く衰微し始めた。然しもう其の時分には『花』よりも『人』であつた、なんでも構はない春が來れば、人は飛鳥山に集つたと物の本にある。

天保から明治にかけて、此の山に土器かほろけを賣る者が有り、花見の客、其の土器を買ひ求め崖下目掛けて投げる遊びが流行したと録されて居る。今の桂文樂が得意とする落語「愛宕詣り」の土器投げは、向ふ側の崖に設けた「的」に向つて投げるのだが、飛鳥山のはたゞ田圃遙か飛んで行くの遠さを競つたものだといふ。花見場所としての飛鳥山は江戸時代から明治、大正の數百年を通じ昭和の今日まで春來る毎に益々民衆的の山花の山となつて居る。

音無川

尙初夏の候は飛鳥山全山緑と化し、遠く富士、筑波の靈峰を仰ぎ近くには荒川の清流を望み武蔵野の俣をとどめ風光洵に明媚であり、近年は市民保健の爲に公園としての施設も完備せられ、秋には諸種いんぐの運動會が催される。

王子を中心として

都心から來た人の眼に嬉しいものは飛鳥山の下邊り音無橋ひじりばし一帶の風色である。お茶の水の聖橋ひじりばしに似た白堊コンクリートの高い橋脚の間から淙々と水を落して居る音無川、夏は青葉、秋は紅葉が此の快調な音を包む。

音無川は石神井川の下流で、紀州熊野の音無川を、名を以て模したものだと言ふ。滔々、淙々、溪流に沿つて廻ること六七丁の處に紅葉寺がある。弘法大師開基と傳へられる堂で、東京の街中まちにこんな溪流地帯もあるのかと思ふと景觀が殊に嬉しく感ぜられる。紅葉寺といふのは「金剛寺」



松橋院の眺望
瀧野河



瀧野河松橋

のは此の處で「松橋院」の號もこれに因つて居ると言はれる。昭和の現代でも楓樹の景觀は杖を曳いて瀧野川盛衰の跡を訪ねるに適して居る。又此の紅葉寺の東に正受院といふお寺が在る。其の寺の背後瀧野川の岸に小さいながら二條の瀑布があり瀑の傍に不動明王が祀られてあつたので、これを「王

のことで、昔から此の邊り一帯が楓樹の眺望佳絶であつた爲、其處に在る寺といふ意味で一口に紅葉寺と稱へて來た。宗旨は新義眞言宗、瀧河山松橋院と號して居る。弘法大師が刻したと傳へられる不

動尊像が本尊として祀られて居る外に源頼朝が房總から鎌倉へ打入の時、此處に陣して兵を集めたとも傳へられ「源平盛衰記」に瀧野河松橋とある



紅葉寺

子七瀑」の一、瀑不動と呼んで有名だつた時代もある。此の正受院に、かの蝦夷地探險者として有名な近藤重藏甲冑姿の石像がある。重藏は文政五年の頃、探險から歸り、此の寺の隣地に居をトし、其の石像を自刻したと傳へられて居る。

普無川を挟んで飛鳥山と王子權現がある。飛鳥山と川を隔てた對岸の丘上に見える東京には珍らしい丹塗の大きな社殿が權現様で、其の景は點綴する樹々の緑と相反映して美しい。飛鳥山の中腹

槍祭り



から見ると正に古典的な土佐繪風の景觀である。

喧嘩祭り



王子神社、即ち權現さま、正確に言ふと、若一王子社はこれも紀州熊野權現を勸請したものである。徳川時代には將軍が參詣したり、美々しく着飾つた御殿女中輩がい、遊山どころとして參籠したといふから、高樓の様な此の階段を登つて行く人の姿は、加賀見山の芝居を見る様な、あでやかさであつたらう。今でも毎夏八月十二、三、四の三日間は昔を偲ぶ田樂祭、俗に「槍祭り」又は「喧



王子権子現全景

んで居るから驚く。鶴といへば飛鳥山一帯、西ヶ原へかけて江戸時代には將軍狩獵の區域だつたらしく、今の十條は其の頃から幕府の御鷹匠が住んだ所といふ。「經師屋」は、めし屋でありながら經師屋と名乗つて居るのがおかしい位のもので、店構へは間口が廣く、繩暖簾がさがり朽ちかゝつて居るあたり、往時街道筋の立場茶屋といふ趣を見るには充分である。

經師屋の前を通つて二三四行つたところが有名な王子稻荷である。落語にまで扱はれて居るお稻荷様、流石にそれらしい社風である。お約束の赤い鳥居は言はずもがな、社殿は石段を登つて崖の上に在る。赤い幟りが其の崖一面に差され、まるで懸崖の幟りである、以つて御利益のほどが窺はれる。芝居の二幕目物の背景に使はれる稻荷様風景と思へば大體社風の描寫が出来る。毎年初午の日に有名な凧市がある。今の社殿は文政年間に出來たものだが、創立は可成り古い。飛鳥山下一帯が田圃であつた時分、百姓が稻荷を祀つたもので江戸時代には此處を「關八州稻荷の棟梁」と稱し

の御守と言傳へられて居る。

王子電車の王子停留場から半丁ばかり離れたところに料亭「扇屋」と一膳めし屋「經師屋」がある。扇屋は「海老屋」(今は亡んで居る)と共に江戸時代からの二軒茶屋の一つで、其の古めかしい店構へや暗い錆び上つた座敷のあれこれが都人の興味を惹き、料理も都心一流店の割烹に比すべきものであり、黝くなつた廊下を少し力を入れて歩くとギシ／＼鳴り、鶯張りなど言ふものに思はれる。今の主人は錦繪の蒐集家で機嫌の好い時には自慢の所藏畫を二階一杯にも擴げて見せてくれる。此處で見せられる王子、三河島あたりの錦繪が、みんな田圃になり鶴が澤山飛



王子稻荷の鳥居

嘩祭り」といふのが此の神社で催される。此の祭りは東京でも僅かに遺つて居る古雅なもので、氏子が大勢甲冑をつけ、えいといと聲を立て、出陣、凱旋の有様を演じ、神社では小さな槍を參詣者に授けて、火難盜難除けの御守にさせる。

喧嘩祭りと謂ふのは甲冑武士に護られて推參する花笠を冠つた稚兒が能樂堂で舞樂をした後、此の笠を堂外に向つて投げ、群集が争つてこれを取る様子を稱して言ふので、此の花笠は商賣繁昌、開運

(大正時代) 王子扇屋





大晦日の晩、關八州の狐どもが寄集り其の狐火が遠近から夥しく見え、そして在所の農民は其の狐火の多少によつて翌年の作柄の豊凶を占つたと言ふ。装束榎——「反古のうらがき」といふ書物に「春の日の長き頃、王子稻荷のあたりに花見の人多かりける。装束榎といへるは稻荷の祠より北四五丁隔りて田の中にあり。これなん歳のつごもりに狐ども寄合ひて狐火焚く時、此の榎のもとにて装束を改むると言ひ傳へたる故なり。此の邊りは、つくし、たんぼ、など多く生出で、飛鳥山の花見る人の歸るさに立寄りて遊ぶ人多かり。また酒に酔ひたる人などは此の邊りにて狐に狂かされ、食物など奪はるゝ者もまゝありける」とある。面白い話である。



装束榎

王子稻荷社

「王子」といふ地名は王子神社から取つたもので此の若一王子社が此處に建てられて居る緣故は、今から約六百餘年前、此の地一帯を所領して居た豊島氏が、所



領の一部を京都東山の新熊野社に獻納し、都から遙か離れた此の武藏國の一隅を同社の莊園としたからで、新熊野社は後白河天皇が紀州熊野社を勸請したものであつたから此處が新熊野社の莊園となると、豊島氏はすぐこれを紀州熊野の本社に模して、若一王子社を迎へ、幸ひの石神井川溪流を紀州の音無川に見立てたとあり、此の邊り一帯の地名に紀州ま



がひが隨所にある
わけである。

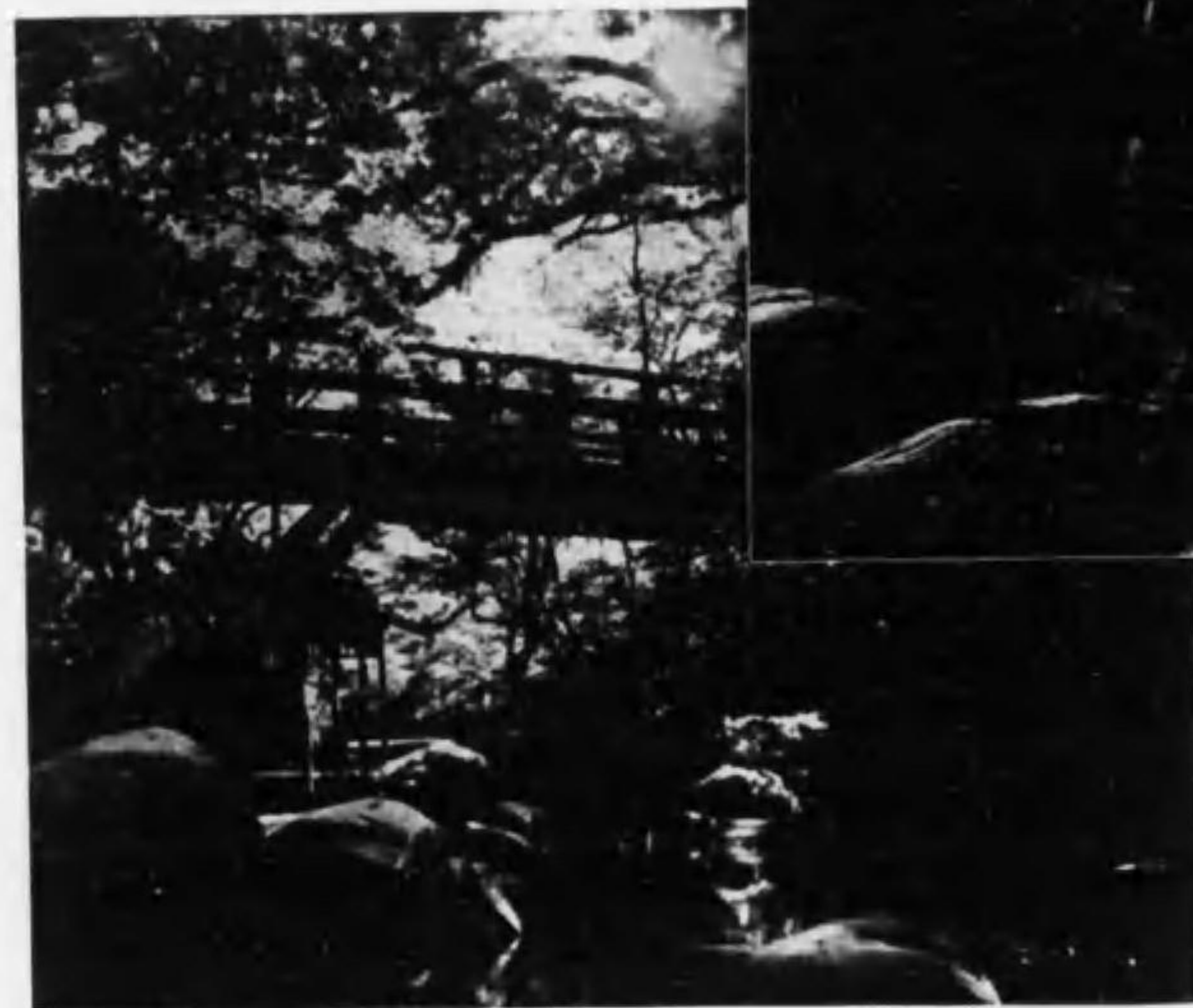
王子稻荷から程
遠からぬ處に「王
子七瀑」名残りの
一たる名園「名主
の瀧」がある。一
たび園内に足を入
れ、ば、都市には
珍らしいまでに苦
蒸して幽邃閑寂、



名主の瀧

楓樹老杉鬱蒼、野州鹽原の景に模したといふ溪流が淺く小
砂利を透して迂曲し、流れに沿うて歩けば奥の方から瀧の
音が聞えて来る。溪流を見下すところ、崖の木蔭、或は高
い所、或は低い所、茅葺に竹の柱式の亭や、茶室、離れ家
が十數棟あつて、茶庭、俳句の會、茗の會、謠の會、歌
の會、琴の會などに利用される純日本式半日の樂園であ
る。夏は涼みのための家族同伴、子供連れの千客萬來、流
れには澤山の金魚を放して子供の掬ひ取りに委せる。

此の園は安政年中に土地の名主畑野孫八が自分の屋敷を手入れして開いたものと言ふ。當時の徳川將軍も



涼みに來られたさうであり、其の後鹽原の景に模して大手入をしたのはさう古い事ではなく、瀧も初めは自
然の瀧であつたが、鹽原模景と共にモーター仕掛の大きなものとなつた。四季の中では紅葉が一番良く、次
いで夏である。

王子を中心として王子電車の沿線には諸官廳工場、大小會社工場が多い。就中我が國最古の西洋式工場を
營んだ印刷局抄紙部及び王子製紙株式會社が王子を選んだのは石神井川、即ち瀧野川——音無川の水流を利
用し得たからである。

王子製紙は「抄紙會社」の名で明治八年七月此處に事業を創始し、印刷局抄紙部は翌九年二月に開業して
居る。王子製紙は當時大藏省三等出仕であつた澁澤榮一氏の發意で紙幣寮から三井組、小野組、島田組等に
製紙業開始を勧めたのに基いて、明治六年二月に設立せられ、英米兩國から機械と製紙技師を招き工場創立
に着手し、明治八年七月業務を開始したのである。維新直後の形勢が大いに洋紙の需要を感じて居り、而も
其の供給を凡て海外に俟つことの非を悟つての創始であるが、當時なほ民間に於ける洋紙の需要が少く、殆
んど官用だけであつた爲、一時は經營困難に陥つたといふ傳統的の挿話さへある。會社名が「王子製紙」と
なつたのは明治二十六年からで年と共に盛大となり今や人も知る如く我が國製紙界の王となつた。今日では
全國に屈指の煩はしきまで所屬工場を持つて居るが其の發祥の地を忘れず今も本社は王子町に置いてある。
現在の資本金は三億圓である。

印刷局抄紙部は明治八年四月大藏省内に抄紙部を置いたのに始まり同年十月水利の便を見て此の地を選び
水車場を購入し、越前から募集した抄紙職工七名によつて翌九年二月作業を始め、以來擴張して今日の大規
模なものになつた。

王子電氣軌道株式會社は皇紀二千六百年曠古未曾有の佳辰に當り恰も創立三十年を迎へ社運隆々たる現状



王子電氣軌道株式會社全景

にある。

王子電氣軌道株式會社は明治四十三年四月資本金百萬圓を以て創立せられ、大塚、飛鳥山間複線僅かに二軒半の軌道に營業を開始し、爾來或は經濟界の不振に因り或は財界の變動に遭遇し、幾多試練の時期を経過しつつ、も常に順調な事業の發展を遂げ、電車線路の延長に伴ひ乗合自動車業を兼營し、又電燈電力供給事業が必要有益なることに着眼して、交通運輸事業と共に之を併せ營み今や資本金二千四百萬圓、帝都近郊の繁榮と共に業績彌々隆昌に赴いて居る。

王子電氣軌道株式會社が現在電氣を供給して居る區域は、東京市豊島區、板橋區、瀧野川區、王子區、荒川區、足立區及び埼玉縣川口市、安行村、草加町、谷塚村、八幡村に跨り、電燈需用家數、十一萬五千餘戸、供給燈數約六十萬燈に達し、電動機に於ては需用家數凡そ六千七百戸に對し約三萬馬力を供給し、その他電力裝置、電熱等需用家數凡そ六百戸、三萬五千ワットを供給して居る。

電車の營業路線は王子區、瀧野川區、荒川區、豊島區、淀橋區の五區に互り、本線は荒川區南千住一丁目の三ノ

輪を起點として、同區の中央を貫き東北本線王子驛、市電飛鳥山終點、省線大塚驛と連絡して更に市電早稻田終點に至る一二・三軒及び王子より分岐して赤羽に至る四・二軒を支線とする互長一六・五軒である。

乗合自動車(王電バス)の營業路線は、豊島區、瀧野川區、王子區、荒川區、足立區、下谷區に互り、本線の一は王子驛前を起點とし、省線池袋驛前を経て鬼子母神裏に至る四・七五軒(此の内池袋驛前、鬼子母神裏間一軒は王子電氣軌道株式會社經營の下に市バスをして乗入直通運輸をなさしめて居る)其の二は王子驛前より三河島宮地に至り、更に省線鶯谷驛に接して市電坂本二丁目に及ぶ六・六五軒、支線の一は、宮地より岐れて市電三ノ輪車庫前に至る二・〇軒、其の二は省線田端驛前より尾久熊野前に至る一・四軒、其の三は王子溝田橋より分岐し江北橋を渡つて、荒川堤を横切り、名刹西新井大師を経て、東武線西新井驛前に至る六・三五軒、其の四は王子より分岐し一は王子電車線に併行して赤羽に至り、一は尾長橋か

王子電車

王電バス



ら岐れて成立商業學校前に至り、一は宮江町から岐れて日産化學前に至る八・四軒で、全互長は二九・五五軒に及んで居る。大東京の西北部に位する此等營業區域は近代工場地帯に在つて、其の發展振りは支那事變以來殊に目覺しく、王子區を中心とする足立區、荒川區一帶は既に新規工場の收容難をさへ叫ばれて居る程である。荒川を渡つて埼玉縣に入れば、「鑄物の街川口」の名も今は昔の通稱に過ぎず、遙かに川を隔て、濛々たる林立の黒煙は大地から生え抜いた力強さを思はせ、工業都市川口市の偉容を横たへて居る。

生産擴充の時局に呼應して、飛躍的な膨脹を遂げつゝ、ある此等工場地帯の發展は、交通の頻繁、電力の需用増大を招致し、ひいて王子電氣軌道株式會社の事業全般に目覺しい躍進を促して居る。最近の業績概況を観るも、電燈電力供給事業の収入は一ヶ月約五十五萬圓に達し、交通運輸事業に於ては電車の乗客數一ヶ月二百九十萬人、賃金収入十四萬圓、乗合自動車は乗客數一ヶ月百十萬人、賃金収入六萬五千圓を計上して居る。

電氣供給、交通運輸事業は單なる營利事業ではなく、公共的性質を多分に有して居り、然も戰時體制下の現時に在つて國防乃至は生産力擴充といふ國策の大本に基き、其の重要性に鑑み、實質上帝都北部に於ける偉大な存在となり社會に對する使命重きを加へるに至つた王子電氣軌道株式會社は社長本間利雄氏を始めとし全社員一致協力、電氣事業界の一翼として聊か貢献せんことを期して居る。

六阿彌陀詣り

江戸の昔から東京の今も變らずに「六阿彌陀詣り」が行はれ春秋の彼岸などにはお爺さんお婆さんは固より多くの善男善女の群れが姿も甲斐々々しく巡禮する。その内三つの阿彌陀様が王子電車、王電バス沿線の西ヶ原無量寺、王子豊島の西福寺、荒川土手の恵明寺に安置されて居る。このため「六阿彌陀詣り」の當日は此等善男善女の乗客で電車もバスもなか／＼に賑ふ。王子電車飛鳥山停留場で降りて東南へ八九丁、其處

に江戸第三番の無量寺が在る。此の寺の本尊は不動尊で宗旨は新義真言宗、昔から雷除け不動と言はれて有名だが、阿彌陀様の方が更に名高い。西福寺は六阿彌陀の第一番で王電バス善光寺前停留場で降りれば間近かに在り第二番の恵明寺は足立區下沼田町で江北橋を渡つた王電バスの荒川土手停留場から荒川に沿ふて二丁程下流で、往昔から此の第二番は延命寺内に在つたが、明治七年同寺が恵明寺に合併されたので「恵明寺の阿彌陀様」となつた。沼田といふのは古くからの地名で江北橋附近も昔は沼田川と稱えて居た。六阿彌陀の中では此の第二番がいちばんお詣りらしい風景の中に在る。

六阿彌陀や其の巡禮詣りのことを知るためには昔も昔、徳川時代以前の「武藏國豊島郡」即ち現在王子電車王電バスの運轉區域よりも遙かに廣い地域のことから説かねばならぬ。「武藏野歴史地理」に「昔の豊島郡の範圍は廣い。今の東京の隅田川以西は大部分豊島郡内であり、延喜式内の豊島驛は今の丸の内にあつたといはれる」平安朝の終りから武家時代にかけては豊島氏と江戸氏とが

此の郡内に居住し、北豊島郡内は殆んど其の全部が豊島氏の勢力範圍であつた。豊島氏亡後太田氏の勢力が此の郡内に擴がり江戸氏の勢力は江戸城を中心として主に其の西及び南に擴がつた」とある如く、現在王子電車、王電バスは豊島氏の膝元を廻つて居るのである。

其の後豊島氏と太田氏が勢力争ひを始め、豊島氏敗れて江戸全體が太田氏の勢力圏となつてしまつた。尙同書には「足利時代に出來た鎌倉大草紙といふ本に『文明九年四月十三日、太田道灌江戸より打ち出で、豊島平右衛門尉、平塚の城を取巻き、城外に放火して歸る。翌年正月二十五日、平塚の要塞へ押寄せめければその曉没落云々』とある。平塚とは今の田端、中里、西ヶ原邊を總稱した名のやうである。今でも上中里に平塚神社があ



る。此の神社の境内が昔の平塚城の跡だとも言ひ傳へる。(中略)平塚城は豊島氏代々の居城である。傳説には其の昔豊島氏の先祖近義の築いたものと稱せられ、(中略)頼朝の時代には豊島清光其の子太郎朝經の名が顯れた」とある。よつて王子電車神谷橋停留場の近くに豊島の清光寺といふ領主に由緒の深い寺も遺つて居る。

やはり右の書に據ると、前記「六阿彌陀」第一番西福寺の條りに

豊島清光の娘に一人の美人があつた。足立郡の地頭足立少輔何某の嫁にやつたが、後、足立と豊島と確執の事が出来て、娘は離縁せられる事となつた。娘はこれを苦に病んで、或夜ひそかに近傍の淺間が淵に身を投じた。初めは誰もこれを知らなかつたが、娘の手馴らした猿がこれを知つて後を慕ひ行き同じ場所に入水した。續いて娘の腰元ども十二人も身投げして果てた。清光は非常にこれを悲しみ紀州高野山に登りまた那智権現に詣で、娘の菩提を願ふた。然るに此處にて一の靈木を得、これを海に入れ、願はくば那智權現の加護により我が本國武藏豊島郡に流れ着けと祈つた。此の祈願空しからず。木は數日にして豊島熊野木といふ所に流れ着いた。丁度此の時行基菩薩が當國巡禮に來たので、行基に頼み彼の靈木にて六體の阿彌陀如來を造つて頂き、此の寺(西福寺)と足立郡沼田の恵明寺、豊島郡西ヶ原の無量寺、田端の興樂寺、江戸下谷廣小路の常樂院、龜戸の常光寺と置き、娘や腰元どもの追善をした。沼田以下の場所はいづれも腰元どもの出生地である。無量寺門前には正徳四年三月に建てた「六阿彌陀第三番目」の標石があるから、元祿、正徳の頃には既に「六阿彌陀詣り」が盛んになつて居たに相違ない。とある。かうして江戸六阿彌陀の由來を尋ねてみると阿彌陀詣りの初めは敢なく亡くなつた姫や腰元に對する後人の同情追善であつた事のやうに思はれる。

とげぬき地藏尊

「とげぬき地藏」の縁日の晩になると、王子電車の庚申塚停留場の踏切からお堂前への「地藏通り」に赤と藍のネオンが一齊に灯されて居た。これは兩側十餘丁の商店が申合せて各自の看板を裝飾したもので、如何に此の町内一帯が「とげぬき地藏」の縁日と取組んで居るかを知らることが出来る。人も知る様に此處は古くから東京三大

とげぬき地藏

縁日の随一言はれるだけに毎月四の日の混雑、露店の數は實に驚くばかり、夏の夜、春の夕の縁日盛りは言ふに及ばず、冬の夜の路は凍り、靴音、下駄の響高鳴るやうな寒風の中でも、其の雑鬧は夏に劣ら





す、露店が路面を刺さず葺めき合つて居る。
 緑日として此處の異風景は、赤ん坊を背負つた内儀さんや子守
 ツ子、小學生服で素足に下駄の少年などの線香賣りが數束の線香
 を手にして群集の間を賣り歩いて居ることである。地藏様の小さ
 な門を潜ると、境内は更に押返されるやうな人混み、突當りどげ
 んき地藏の在します本堂の前に軒近くまで渦巻き廻つて居る大き
 な火焰に驚かされる。これは參詣者が此處に供へた鐵製の大香爐
 の火へ次から次へ投げ入れる線香の大火焰であり、其の周圍には
 大勢の參詣者が病氣のあるところが癒るといふ信心から入替り立
 替り焙つた手で顔や手足を摩擦して居る。大火焰の傍には二、三
 名の寺男が控へて居て焰が大きくなり過ぎると、手桶の水を投掛
 けて鎮める、それが時々周圍の露店へざぶりと來る。

とげぬき地藏を安置してあるお寺の本當の名は「高岩寺」曹洞宗永平寺派の末寺で、「縁起」には
 正徳五年乙未の年、江戸毛利邸につかふる女、折れたる針を口にくはへ、過り呑みて咽に刺ち抜かず後は
 腹中に入りて甚だ苦しむ、諸醫手を拱き、諸藥其の效なし即ち此の靈驗あらたかなる地藏尊の御影一枚を
 水にて呑ましむ、暫らくありて吐逆す、其の中に御影あり、水にて流し見るに四分ばかりの針の折片は御
 影を貫き出でたり、座中奇異の思ひをなせしよし、此時より「とげぬき地藏尊」と申し奉る。誰人も御影
 を戴き信じ奉りて其の感應を得べきなり
 とある。

庚申塚より板橋へ

遠く明暦の頃から板橋街道の「庚申塚」と言ひ傳へて
 有名な巢鴨の庚申塚は西巢鴨四丁目に在り、王子電車も
 「庚申塚」を停留場の名として在る。庚申塚は全國何處
 にもあるが特に此の庚申塚だけが廣く且つ古く地名とし
 て用ゐられて居るのは、往昔中仙道往來の旅人が、傍の
 團子茶屋四軒を立場茶屋として休憩するを例としたの
 で、いつか旅



庚申堂

人の間に「庚
 申塚」の呼び名が親しまれ今日に遺つて居るのだといふ。昔の塔
 は高さ八尺もあり、邊りの人家も疎らであつたので旅人を苦しめ
 る盜賊などが蔭に匿れて居たといふ。其の大きな塔は文龜三年に
 建てられ、後それが破壊したので明暦三年三月に旅人の賊難を考
 へて塔を小さく建て其の下に前の破壊れた古塔を埋めたと文獻に
 ある。現在のものは即ち明暦三年の塔である。祭神の猿田彦は戰
 さ神、今度の支那事變で出征する町内の軍人はみな此處に武運長
 久を祈るを例とする。

近くに在る延命地藏は此の邊りが未だ武蔵野の原であつた頃旅
 に行き暮れた久若丸といふ稚兒が病に罹り亡くなつた跡ださうで



延命地藏



近藤勇之墓

墓前に達する。三角形の狭い地形に鐵柵を廻らし、正面に墓標がある。

近藤勇が此の附近の刑場で斬られるや、屍を此處に埋めたのを親族の者が即夜盗み去つたといふ。今此の墓地跡に遺る碑は尺二三寸角、高さ一丈五六尺、表に「近藤勇宜昌、土方歳三義豐之墓」裏に「發起人舊新選組永倉新八改杉浦義衛」と刻してある。人も知る如く近藤、土方の兩人は徳川幕府徵募の浪人隊の頭となり、新徴組解散の後、新選組を組織し、近藤が隊長、土方が其の副長となり京都壬生物藏寺に屯し佐幕派の爲に活躍したことは維新史に示す處である。近藤茲に刑される時三十五歳、明治元年四月二十五日のことである。

永倉新八が此の碑を建てたのは明治八年四月であるが、傍に「新選組永倉新八之墓」從二位勳三等侯爵蜂須賀正詔書と刻まれた立派な墓が竝んで居る。

後年板橋宿の武兵衛といふ人が色々の奇夢を見、此の稚兒の靈により危篤に陥つた一子の命を救はれた報恩の爲に建てたのがこれであるといふ。

幕末の劍士近藤勇の墓は、昔時板橋刑場の跡、現在の瀧野川區瀧野川町に在る。以前は荒涼たる此の邊りも今では小住宅街として發展し人家に取圍まれてしまつた。

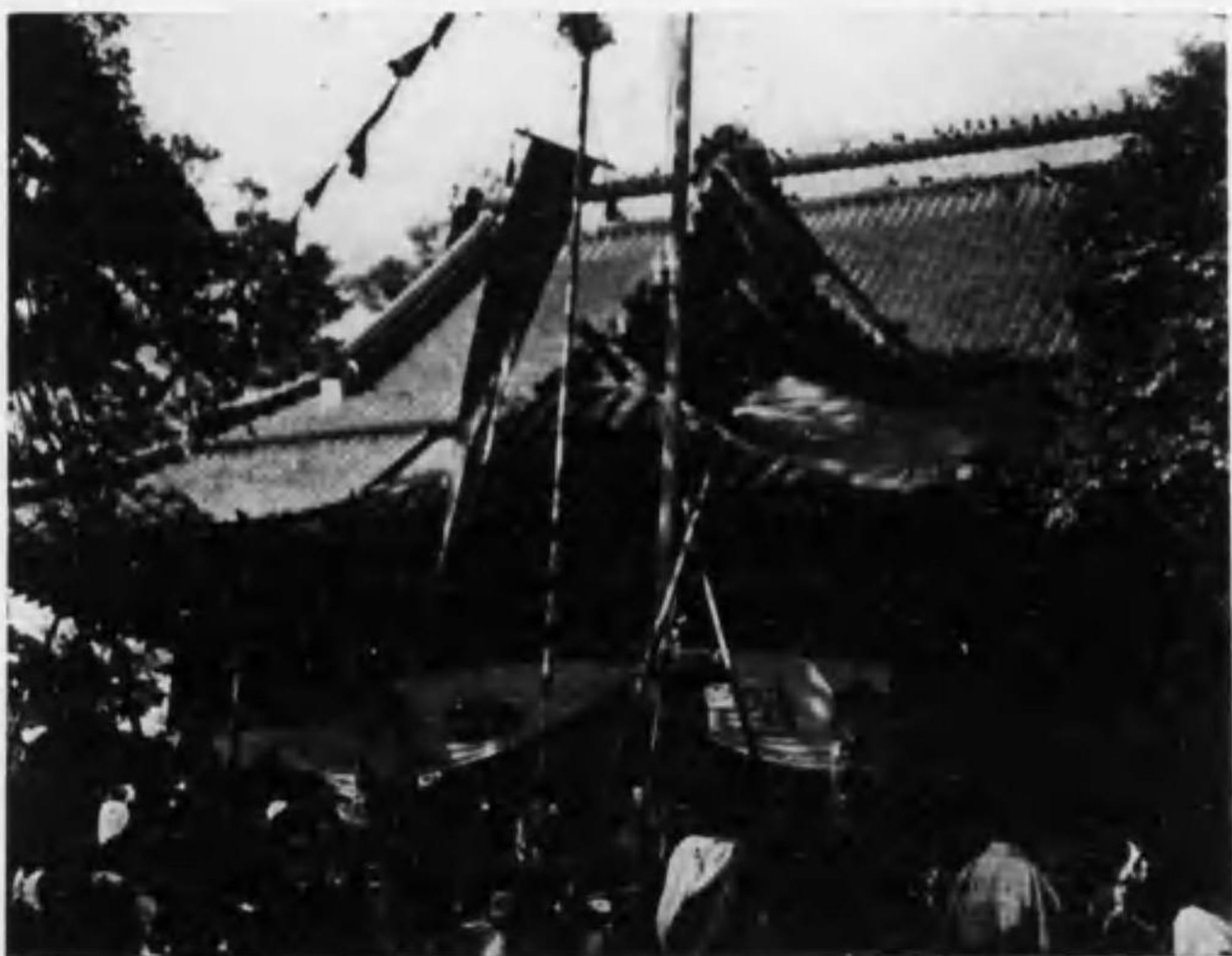
王子電車、庚申塚停留場下車「とげぬき地藏」とは反對に西北へ向つて約八九丁「史蹟近藤勇之墓」と刻まれた石標について左折すれば

雜司ヶ谷の鬼子母神

雜司ヶ谷鬼子母神と言へば明治の中期までは都座を遠く離れた田圃道の參詣、江戸時代も、明治の東京も比較的下町情緒の人々となつたりがあり、従つて都心を離れて居ながら境内は信心、野趣、粹すいが織り絡んで居た場所である。

昭和十五年の今日、王子電車鬼子母神前停留場で降りると、評判の標竝木は往年の名残りを止めて兩側は楯比する商店街ながら、仰いで空を摩する壯觀をほしいまゝにして

標の竝木道



鬼子母神堂

居る。薄穂で拵へた名物「み、づく」のお土産物も、今では縁日の折に二三軒出るだけで平常は影も見せぬが、押寄せる時勢の波に抗して今、此の境内に昔時の俵ひがしを残して居るものも少くない。





薄穂の土産「み、づく」

い。境内に三軒だけ残つて居る昔風の
休み茶屋がある。腰障子に筆太の屋號、
土間の茶釜、上り框の敷物、軒下に並
べた幾つもの床几、納め手拭、木彫り
の納札、そして奥には小座敷も續く。
こんな風景の休み茶屋が今の東京中に
何軒残存つて居るであらうか。鬼子母
神の故事、來歴は知らずとも此の掛茶
屋に茶をすゝり、靜かに江戸の此の附
近、明治、大正の鬼子母神境内を想ふ

だけで足を運ぶ價値はある。

昔此處のお土産は今に残つて居る「み、づく」の他に風車、麥藁細工の角兵衛獅子、名物の喰物では、今もある里芋の田樂、焼だんごの外に川口屋の飴、蕎麥切、雀焼があり、此の雀焼は昭和も最近まであつたが三四年前に絶えてしまつた。舊記や錦繪類には當時知名の料理屋が軒を並べて居て、特に芝居で有名な「め組の喧嘩」の手打ち式が行はれたといふ「めうが屋」などが著名になつて居るが、今其の家は無い。舊記類にはみな此處の蕎麥を褒めて居る。東京に數ある「賑そば」其の最初は此の邊らしく「續江戸砂子」に「社地の東方、

法明寺山門



町を離れて藪の中に一軒あり」とあり、藪の中の奥まった極めて閑静な家で、文化、文政頃には蜀山人、英一蝶、酒井抱一などの文人墨客が愛好した場所となつて居る。乃ち「藪そば」の發祥地である。

雑司ヶ谷といへば鬼子母神を思ひ、鬼子母神といへば雑司ヶ谷を聯想するが、此の鬼子母神堂に隣接する日蓮宗威光山法明寺といふ古刹を知らない人が多い。尤も此の寺院の境内に祖師堂があり、毎年十月雑司ヶ谷のお祖師さまとしてその盛んなお會式は知られて居るが、鬼子母神堂は此の法明寺の支院である。傳統から言つても法明寺は六百年、鬼子母神堂は其の三分の三百年の歴史なのである。今、建つて居る鬼子母神の堂宇は加賀百萬石の大名、前田利常の女、滿姫の寄進建立したもので、往昔から稻荷の社跡と言ひ傳へられた叢林を拓き、天正六年堂宇を經營、ここに安置されたものである。

鬼子母神、本の名訶梨帝母、今、此の堂内に祀られて居る尊像は、永祿四年土地の名主柳下若狹守の下僕山本丹右衛門なる者が附近の池中から掘出したもので下僕の手から受取つた若狹守は「こは勿體なし」と法明寺の寺中東陽坊、今の大行院に安置した。偶々大行院にさすらひ來つた安房の行脚僧が、これを盗んで故郷に持ち歸つたが忽ち病氣となり、病床で「我は元武州雑司ヶ谷に在り、彼地の衆生機縁既に熟す、正に濟度すべき時を得て泥土より出現せしをこゝに移すこと我が意に非ず、直ちに元の地に歸すべし」と囁語した。聞いて居た村民が驚き恐れて雑司ヶ谷東陽坊に送り還した。雑司ヶ谷の村民は尊像の靈威に感激し、別に草堂を創つて安置したのが前記天正六年であると縁起にある。

法明寺



五元尊
鬼子母神
の夫であ
る圓満具
足天と其
の子、十
羅刹女が
祀られて
あり、外

尙本尊の傍には鬼子母神の夫である圓満具足天と其の子、十羅刹女が祀られてあり、外

雑司ヶ谷鬼子母神堂



門前
酒内
佐々木
林も
今多し

に境内には驚大明神（疱瘡除けの神様）稻荷祠、子授け银杏といふ有名な老银杏樹も残つて居る。
鬼子母神は子供の守り本尊、子授け願ひの場所として思へばお伽話の様な無邪氣さ、可憐さ、だれでも親しめる靈地である。
秋季十月十八日
東京中に知られる日蓮宗の三大會式、池上、堀之内、雑司ヶ谷と並び稱され、萬燈雲集す

る鬼子母神の北へ數歩、見るから山緒ありげな仁王門が法明寺の山門である。此の仁王門左右の像は運慶作と傳へられて居る。

此の寺は今から凡そ千百年前の弘仁元年慈覺大師の創立にかゝる。初めは眞言宗の道場であつたが中途に嚴譽院日源上人が日蓮宗に改めてしまつたので今では、日源が當寺開山の祖となつて居る。

曾ては庫裡が飛驒匠の手斧作りで有名だつたこと、楠氏の息女が植ゑたといふ銀杏の樹のあること、釋迦堂の他に祖師堂があり、此の堂も飛驒匠の作になり堂宇の内には日源上人手刻の宗祖日蓮立正安國論講説の像が安置されてあつたこと、又往昔は源家累代祈禱の護摩堂であつたことなどが傳へられて居るが、それらの山緒ある建物は天保元年に焼失し、現存するものは其の後の建立である。然し其の有難みよりも、春や秋の日の閑寂な散策、十月お會式の夜の賑ひが今の人々の生活に深く沁みて居る。

尙「雜司ヶ谷若葉集」によれば、威光山の歴史は、眞言宗稻荷山威光寺時代と、日蓮宗威光山法明寺時代とに分けられ、威光寺時代とは平安初期の弘仁元年此處に寺を創して以來、鎌倉時代の正嘉、正元の頃迄、約四百五十年の間、眞言の道場として土地の發展に、又は文化の開發に重大な役割をなして居た時代を言ふ。

法明寺本堂

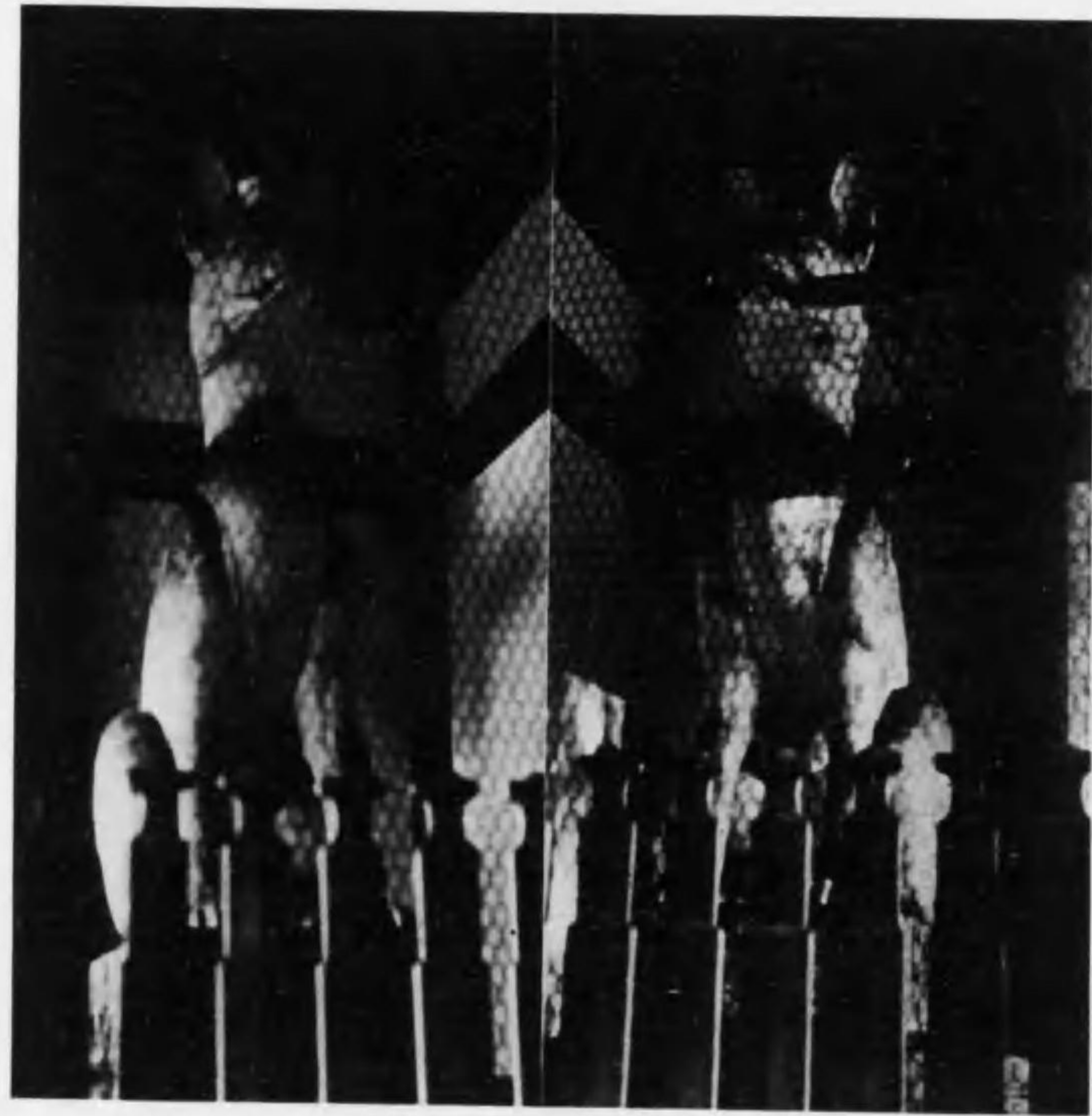


法明寺時代とは日蓮上人が鎌倉に法戦を張られた頃、日源上人によつて改宗され從來の威光寺が威光山法明寺と改稱されてからの時代である。

日蓮が一代の論策である立正安國論著作のため天台宗の岩本實相寺の經藏に入られた時、日源は其の頃嚴譽律師とよばれ、當時の學頭職であり、たまたま日蓮の論講を聴き深く歸依するところがあり、弘安元年日蓮を身延に訪れて法弟となられ、此の法明寺を始めとし、岩本實相寺、碑文谷法華寺、駿州正法寺、同東光寺等有名な寺院の開祖となられた。二世日賢以來相傳し、六世日珍以後大永年間より慶長年間までは、法明寺初期の衰頹期を呈したが、九世日雄の頃より回復した。然るに十五世日了は宗祖の折伏的方面を傳承して法華經信者以外からは施物を受けないといふ所謂「不受不施」を信奉した爲、切支丹同様遂に上意違背の廉で寛文年間讃州丸龜へ流された。十六世日證は此の義を捨て、寺勢を挽回し、其の後再び「不受不施」が行はれた爲に、谷中威應寺及び前記の碑文谷法華寺は天台宗に改宗させられてしまつたが、法明寺のみは元祿の末二十一世日教に至つて身延の末寺となり、此の難を免れて、法脈を今日に傳へることを得た。日教は嚴格な山規を制定して一山を肅正し、當山中世に於ける中興の祖と言はれて居る。日蓮に至つて堂屋、輪奐の美を整へ、現在の梵鐘は享保十七年上人の代に鑄造されたものである。更に數代を経て日宏は大いに寺運を改めたが、日徳在住の天保元年釋迦堂からの自火によつて弘仁九年建立の有名な祖師堂を始め威光山の伽藍は殆んど焰上してしまつた。其の直後池の瑞の宗賢寺から入山されたのが、當時四十歳の日持で、天保の危期」と呼ばれた内憂外患繁き時期に處して、飽くまで山内を肅正し、威光山今日の基礎を固め近世に於ける中興の祖と言はれて居る。それより數代を経て先住日龍は三十五年の間に内は伽藍の美を致し現在の本堂も上人の念願になつたものであり、出でては宗門の樞機に參與して長老と仰がれた。かやうに幾度かの受難時代があつたにも拘らず歴代上人護法の念によつて七百年の傳統を絶やすことなく今日に及んで居る。

法明寺本堂右隣の一帯はコンモリした木立に圍まれ、青いものに飢えた都人士の目に好ましい風景である。

其の木立の中の小高い丘に「開運威光天稻荷社」が鎮座して居る。境内に樹木の多い故もあるが、お稲荷様といへばとかく下町風の情緒を思ひ浮べる東京人の目には何かしら異つた感じである。高さ三尺餘の木彫の白狐一對を左右に納めた山門の構へも珍らしい。



威光天稻荷の白狐

爵のよくお詣りされた姿が今でも近在の人の記憶に生きて居るさうな。

縁起に曰く「開運威光天稻荷尊天は往古慈覺大師の守護神にして尊體は大師の御自作なり、嵯峨天皇の御宇弘仁元年の頃當山に勸請し奉り靈驗奇瑞頗る多く洵に廣大無邊の尊神なり」とある。弘仁元年即ち平安朝の初期今から約千百卅年前に勸請された由緒からも尊いお稲荷様として崇められる所以はある。土地柄でもあらうか參詣する人達が地味といつては語弊があるが、眞摯な信心柄であることを感じさせる床しきがある。元の外相有田さんの參詣姿も見受けられたし、亡くなられた澁澤榮一子

高田の馬場

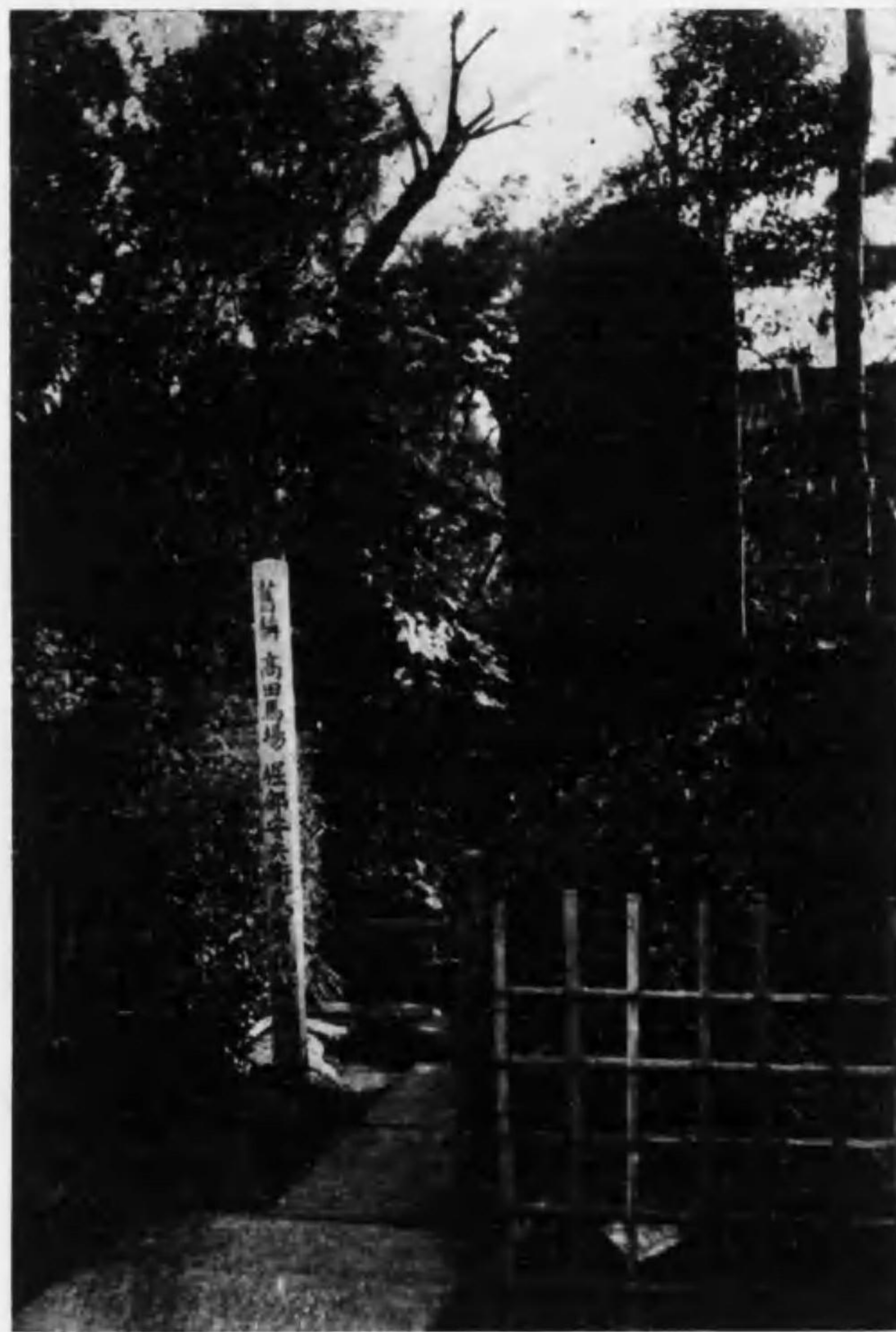
太田道灌の遺跡「山吹の里」は王子電車面影橋から北へ數歩、豊橋の北詰に近年まで其の俣を止めて居たが、今は工場の庭となり一基の碑を残すのみで昔を偲ぶよすがもないが、赤穂義士傳中の人氣者、堀部安兵衛武庸、高田馬場仇討の遺跡は、土地の人の發念で立派に残されてゐるのは頼母しい。

面影橋停留場の南へ入ると道は直ぐダラ／＼坂になる、更に此の道を上ること二三丁、上り切つた丁字形二三間巾の道を左に折れて一二丁、小さな商家や住宅街の右側に四五百坪の空地があり、植木と石燈籠が行儀よく置かれた表側道路に面し廻りを青竹柵で小綺麗に取り囲んだ中に「堀部安



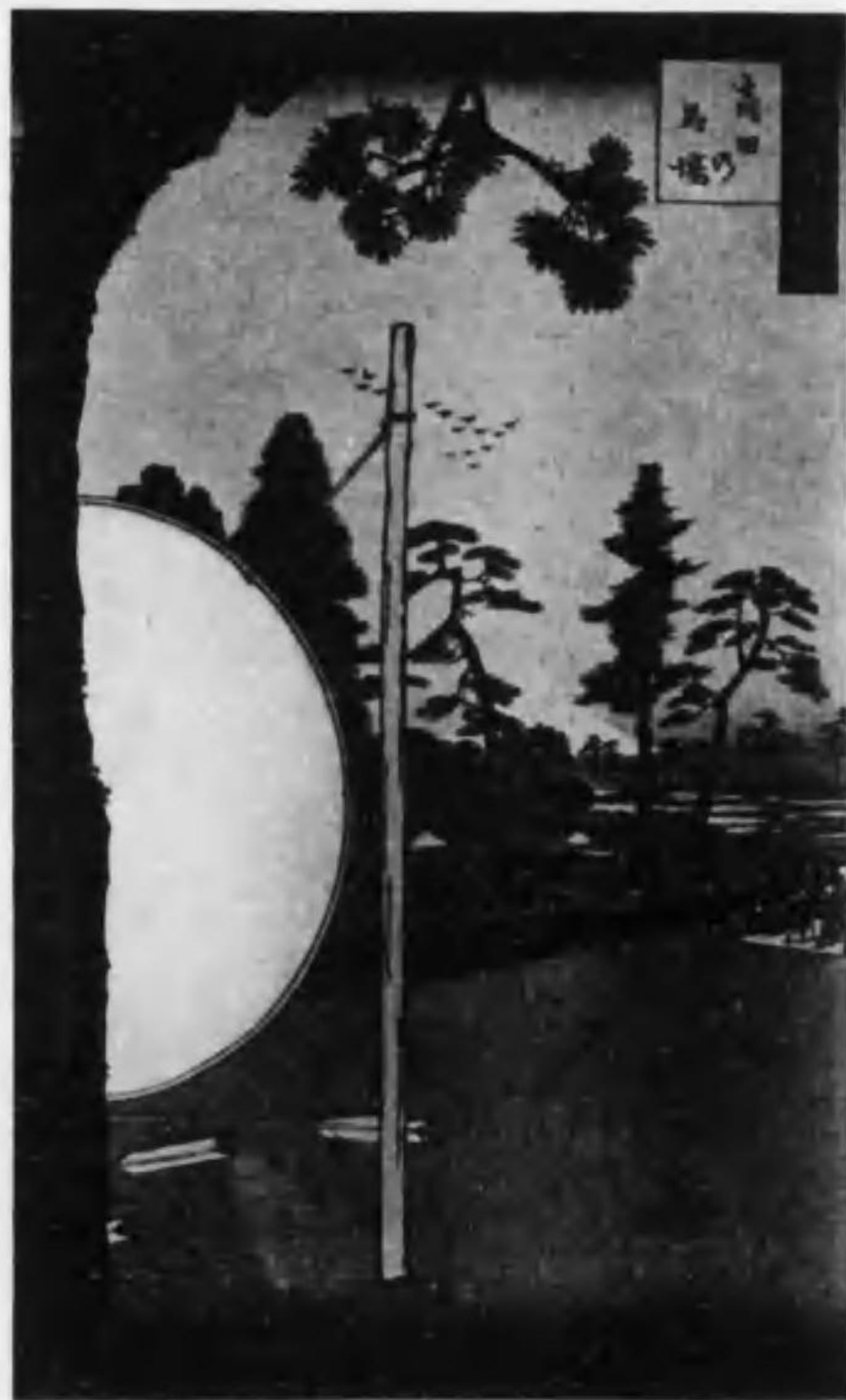
兵衛武庸加功遺跡之碑」が建てられてある。

尙武の馬場、殊に流鏑馬の競技が盛んで有名だった此の高田の馬場華やかなりし頃、此の邊りには武士をもてなす茶屋が七軒あつたさうで、茶屋といつても中には弓師を兼ねたものもあつたといふからちき／＼に名だたる士に可愛がられて鷹揚な渡世を送つたものらしく、當時「高田の馬場の七軒茶屋」として相當鳴らしなもの、由である。



堀部安兵衛討伐の碑

此の碑を建てた行田市蔵も、此の七軒茶屋の子孫の一人で、明治維新の折、馬場が廢止される際に、拂下を乞ひ桑や茶畑として耕して居たが、此の人かねてから熱心な念願を立て大正二年に自費で此



高田の馬場の圖

の碑を建立したのである。篆額は正二位勳一等西園寺公望の筆、碑文は正二位日下部東作筆になり、堀部忠藏刻とある高さ二間巾三尺仲々立派な碑である。

碑文で見ると元祿五年中山安兵衛が此處で仇を討つたのが丁度二十歳、堀部金丸の女阿幸は時に纔か五歳とある。芝居や浪花節で、安兵衛の禪にかけさせたといふ赤いしごきを締めた花の様に美しいお嬢さん姿

の阿幸が偲ばれる。阿幸は許嫁となり安兵衛は婿入して堀部氏を名乗つた。吉良邸討入は元祿十五年であるから時に安兵衛三十歳、阿幸は十五歳に當る。寄邊を失つた阿幸は芝高輪泉岳寺前に住む袈裟屋某に引取られ、身は尼となつて夫の墓を守りつゝ、餘生を送つたと傳へられる、其の袈裟屋の子孫が維新の頃、自から堀部の姓を名乗りその後生業も石工となり泉岳寺の用を達して居た緣故で先代の忠藏といふ人が碑文の刻み役を買つて出たといふ。碑に堀部忠藏刻とあるのはさういふ因縁である。

三ノ輪、三河島、尾久

上野、鶯谷附近から根岸・田端・三河島・尾久方面の平坦地帯は王電バスが縦横に通ずる處で、路線は市

電下谷坂本二丁目に始まり途中省線三河島驛や、京成新三河島驛と連絡し更に三ノ輪へ、田端へ、王子へ、そして山手線を越えて雑司ヶ谷へ、又更に遠く西新井へと達する。此の一角は關東大震災後、間もなく長足に發展し、大商店、小住宅、諸工場櫛比し、廣い街頭も比較的整備され、車馬機軸として股賑を極むることとなり、「吳竹の根岸の里」も畫人墨客が標札を並べた明治大正期の「田端」も、もはや昔語りである。大東京として發展した今日、此の區域一帯に於て王電バスは極度にまで實用化され、生活化され沿線の人々に利用されて居る。

その内、昔ながらの風流名物として此の區域に今も残るものは根岸の豆腐料理「笹の雪」に、芋坂の團子、田端の蕎麥である。「笹の雪」には王電バスの停留場が設けてある。昔の俵を今に移す由もないがそれでも黒板扉に、荒削りの門、それに豆腐料理の簡素な看板も床しく掃き清められ水を打つた入口が靜かに客を待つあたり、流石に傳統の風景である。

三ノ輪、王子間の電車は此の平坦地區に敷設された王子電車第二期工事の軌道である。開通當時の大正二年頃は到る處葦荻の點在する郊外氣分漂ふ場所であつたが間もなく工場と街衢との間を貫く電車となり以來逐年軌道兩側の繁昌と共に今や文明の重壓下を駛する電車となつた。

電車沿線で第一に擧ぐべきものは、先づ例年十一月の「淺草西の市」である。正確には下谷區龍泉寺町大鷲神社の祭禮である。明治中期までは吉原田圃の中に在つたので江戸人は此の方面を總稱して「淺草」と呼び、今に傳へて淺草の西の市となり東京の一



笹の雪

(明治時代)



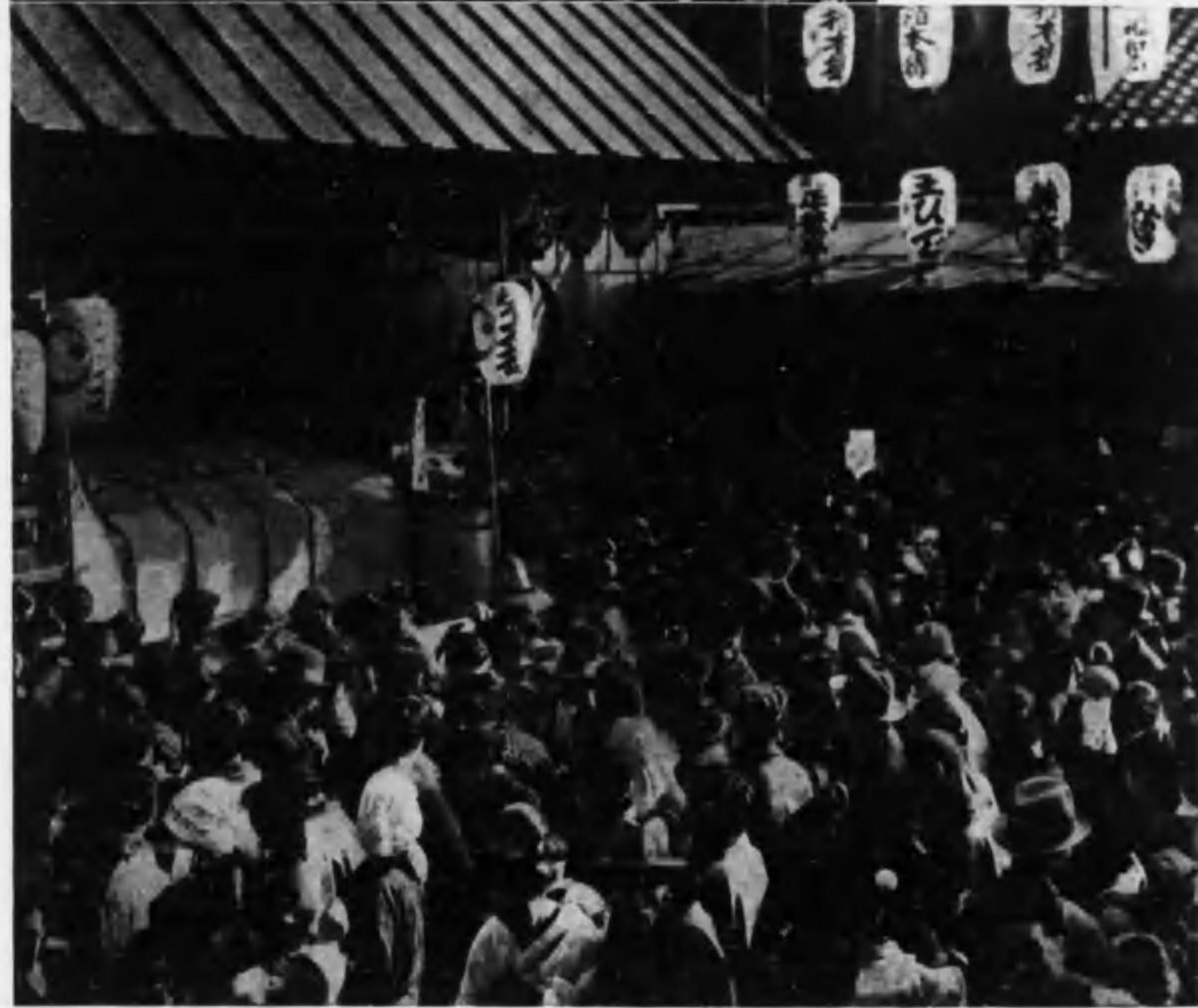
大年中行事となつて居る。其の雑沓は全國に響き渡つて居り、帝都の西、北、山の手方面から參詣する人は大概王子電車又は王電バスに依る。當日電車、バス内は大きな熊手、

小さな掃込めで一杯になる。江戸傳統の信仰は強く市民一般に維持せられて居る。

三ノ輪停留場の直ぐ傍に近年來「南千住銀座通り」と呼ばれる街が出来た。狭い小路に映畫館やタバコ落しの射的所など震災後に簇出した郊外何々銀座の一例であるが、さすが此處の銀座だけは此の界限特有の色彩濃厚で、無雜作に並べた肴屋の店舗が二軒もあつたり、おでんの鍋から煙りがあがつて居ながら直ぐ其の鍋の傍で今川焼や鯛焼を賣つて居たり、凧や獨樂、メンコを並べて居る駄菓子屋が挟まれたり、大きなマーケットの側に五色揚げ専門の店があるとか、蒲鉾屋が短い小路に二軒もあるなど、そゞろ歩きに面白い。夜は此の附近一帯からの買物場所、散歩場所となつて居る。古い事を考へ出せば天明の頃、此の附近といふよ

りは淺草以北一帯が田圃で農家が点在した時分、此處に綾衣といふ遊女と藤枝外記といふ若侍の心中があつて、君と寢ようか五千石取ろか、何の五千石、君と寢よ、といふ唄を當時の吉原遊廓に流行らしたことがあつた。それを後年故岡本綺堂が「箕輪心中」として劇化し、左團次と松蔭が時々上演して居たが、そんな跡が今何處に在るのか偲ぶよすがもない混雑と騒音の街である。

大營神社西の市



東京に砂町、芝浦、三河島と三箇所ある東京市汚水處分場の一つが王子電車三河島停留場の近くに在る。我が大東京の下水の行く末を一應視察するのも有益であらう。東京市の案内記には「明治四十四年事業を開始（市内の一般改良下水工事を指す）してから本事業に投じた費用約一億二千三百萬圓、下水管渠敷設延長約百七十二萬メートル、一ヶ年間の維持管理費約百四十萬圓、下水道事業は本市事業中に於て重要な地歩を占めて居る」とあり、此の三河島汚水處分場は其の大事業の一斑を窺知するに足るものである。

我が國端艇競技會の檣舞臺である尾久コースは王子電車熊野前、宮ノ前の兩停留場の近くであり、又大震災後發展した所謂尾久紅燈の巷も此の附近一帯である。此の紅燈の巷は大正四年尾久願雲寺境内に鑛泉が湧出し諸病に奇效があるといふので寺内に据風呂を設け湯治希望の浴客を迎へたのに始まりその爲め今では手輕な温泉情緒の漂ふところとなつて居る。

西新井大師

西新井大師は王子から玉電バス二十五分の行程で、バスに揺られて大師へ行く途中の景色は春でも秋でも長閑である。荒川へ出る迄の商店街、工場街の雑沓は此のバス路線が實用に供せられて居る事實を示して居



西新井大師本堂



大師お籠堂

大師境内

るが、出勤、買物、用達などの乗客が降りてしまひ女車掌が可愛い、聲で、「次は豊島橋でございます、曲りますから御注意を願ひます」と呼びかける頃になると車窓から見える景色は俄然展開して野の色、水の色が青々と迫る。豊島橋は荒川に架る橋、近くの荒川放水路には江北橋が在る。岐れて流れる水が悠悠として藍を湛え、堤は春なら緑、秋なら一

面の黄を敷いて到る處、摘み草、釣魚、船遊びに適し、ゴルフリンクが眼前に展開する。とりわけ春の緑には花霞棚曳き江北橋沿岸には有名な荒川の五色櫻が咲く。バスは此の二筋の川を越え、間もなく大師の門前に着く、バスは此處へ信心の人々を降して更に東武鐵道の西新井驛前で終點となる。

此の地方の人々は「川崎の大師よりも、此の大師さまの方が寺格はい、が地の利を川崎にとられたのと、こちらのお寺の坊さんが世間臭くなかつたので金看板を川崎大師にとられたのだ、その積りで参詣して戴きたい」と言つて居る。

山門通りに立つて、著しく川崎大師と違ふところを発見するのは、兩側に立並ぶ茶屋の庇が深く店構の用材が古く、廣重描くところの往時の茶店式趣があることである。藍色の納め手拭が



大師山門前

日露戦役陣歿者供養地藏尊



大師巡錫の像立



軒先にひら／＼したり、お土産物を並べて客を呼んで居る聲は川崎と同じ風景だが、嬉しい事に此處には榮螺の壺焼がある。貝殻を店先に積み上げ、生醤油の焼

きつくじで参詣人の食慾をそ、つて居る。壺焼を名物とする江の島でさへわざ／＼店構へを改造して以前の様子が見られなくなつたのに此處ばかりは往昔のまゝの野趣を籠めた壺焼風景である。

川崎の葛餅に對して此處では草だんごを賣つて居る。團子の青い色が目に泌みるほど鮮かである。

大師の境内は丘や樹も少く幽玄味に乏しいが「廣い果しもない武蔵野の中に恐らく茅葺であつたらう一字の堂、其の前に額づく巡錫僧弘法大師の佗び姿」を幻想するとき自ら有難さが湧いてくる。當寺「縁起」の記す處によると

「嵯峨天皇弘仁十年の春、武蔵國足立郡のあたりに悪疫流行し日々殞る、者數知れず、人は死の恐怖に戰いた。其の頃、弘法大師の空海は諸國を巡錫して東北へ志す路すがら此處に足を駐め村民等の苦しむ狀に心を痛められた。或る日一樹の

梢に忽然紫雲棚曳き光明赫灼として十一面觀世音菩薩が現はれ「空海よ、今年汝に大厄起る。今、此の地諸民の苦しむ病災を祓ひ退くる爲に厄難消除を祈るべし」と宣ふて姿を消した。空海乃ち一月に三禮して十一面觀世音菩薩の像を彫み、剩つた材を以て自像を彫み、三七日一千餘座の護摩を修し自分の大厄と村民の病厄とをみな此の自像に負はせてこれを井水中に沈めた。流行病は熄んだ。そればかりか不思議な事に一度井中に沈めた木像が或夜忽然と護摩壇に飛來し御足の立てるあたりからは滾々と清水が湧いた。空海感激して其の觀音像を本尊として一寺を建て、右の湧き水を加持水とした。これが五智山遍照院總持寺（此の西新井厄除大師の正しい名稱）で、湧き水の所が現在の閻伽井だ。此の井戸が西方に在るので里の名を西新井と稱ぶやうになつた云々。」とある。

弘仁十年とあるから、昭和十五年の現代から數へると約千二百二十年前の創立になる。境内には本堂の外に大書院、鹽地藏尊、弘法いろは塚、影向の松、奥の院、海運辨才天、榮螺堂、日露役の陣歿者供養地藏尊等々一々縁起の深いものがある。毎年三月二十一日大法會を修して開帳が行はれる。

荒川の堤

普通言ふ荒川堤は延長上下約二里に亘つて隨所其の景趣を異にし、豊島橋、江北橋の邊りは錦繪風の田園情緒豊かであり、沿岸を上流へ廻れば、水門公園、新荒川大橋の附近は近代的施設風景となる。先づ目を奪ふものは荒川放水路の大水門である。此處へは省線王子驛から王子電車に乗り換へ、終點の赤羽停留場から僅かの處である。大水門は内務省直轄工事に成り、工費百二十萬圓を投じ大正五年に起工、同十三年竣工したもので、荒川増水の際電動装置の此の水門を閉めて激流を放水路へ誘ひ、從來屢々浸水の厄に遭つた隅田川沿岸の大水害を阻むための大設備である。一眸した處では白いコンクリートと鐵の小城廓を見るやうだが城廓の屋上は芝生となり、櫻花となり、「水門公園」と稱へて春又秋、散策の好適地になる。王子電車は銃後



水門公園

體位向上の一助にもと日曜日には賃金の割引をして居る。番人に問ふまでもなく、出入自由親しく水門を見物することが出来る。説明があららこちらに掲示してあるから、これを読み見物すれば一應の水門知識は得られる。

放水路公園散策



此の邊りの土手は全部芝生でそれが綺麗に起伏し、四邊の近代的設備と照應して歐洲風景の石版畫を見る様な氣もする。春、夏、秋はピクニック、摘草の家族連れが芝生の上で雑話を開き、握り飯、海苔巻、サンドウィッチなど團樂を喜ばせ、又

荒川堤の五色櫻



もの鐵柱が雲の中の銀線のやうに光つて見える。其の邊りには植木村として名高い安行や、江戸ッ子の嗜好する鹽煎餅の名産地草加がある。

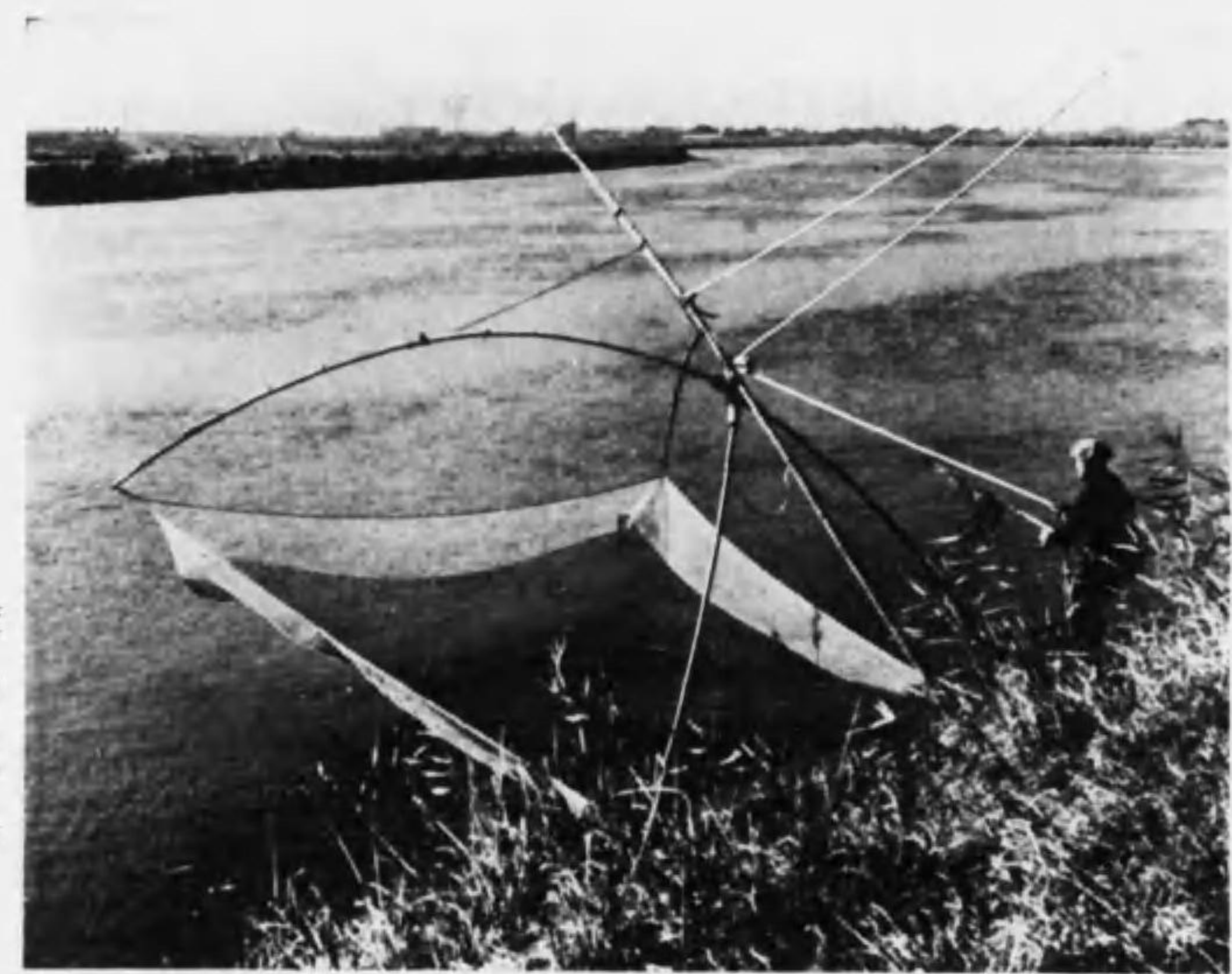
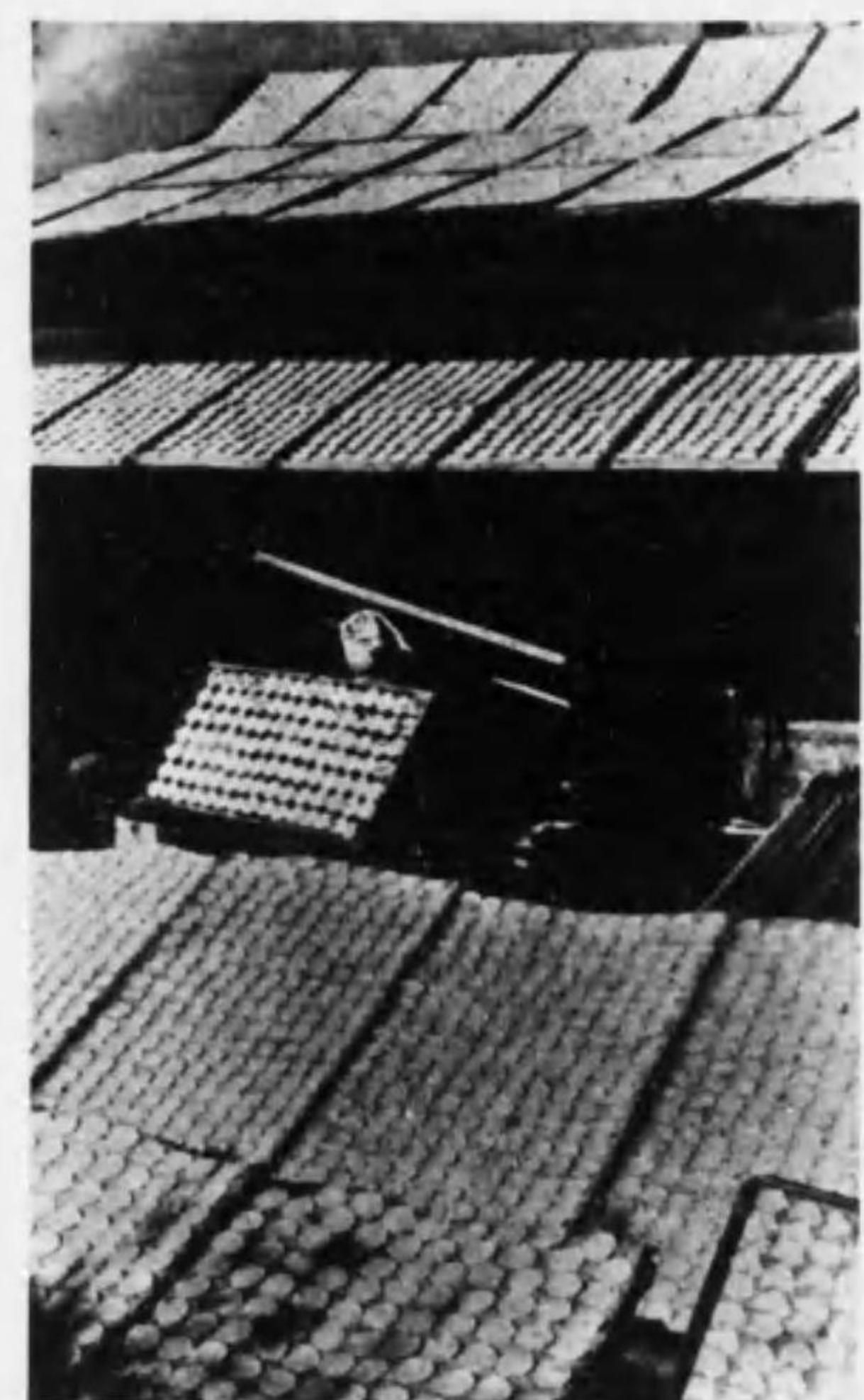
荒川堤の四季のうち冬は又、子女、小學生などの體力訓練の見學場所になる。赤羽工兵隊の兵隊さんが寒風身に泌みる朝夕でも、荒川の氷を



割つて諸種の演習を行ふ。霜に凍る軍歌の合唱、行軍の靴音、勇ましい軍隊作業の数々は、親が語らず教へずとも子女に深く感銘せしむるものがある。

新荒川大橋の袂から眺めた對岸、堤防内側の低い木立の間に青銅葺きの屋根が一際目立つて見える。これが川口の善光寺である。今から七百五十年の昔、碩徳定尊上人が信州の善光寺如来を信仰し、發願して建久六年五月如来尊像を鑄造し上人これを笈にして諸國を巡化中此の川口に至り一字の堂を建て笈の尊像を安置したのが此の寺の始まりと傳へる。功德無邊とあつて賽者のあとを絶

草加煎餅



荒川風景

たない。王電赤羽から新荒川大橋を渡れば、わけなくお詣りが出来る。

放水路の西新井橋附近一帯、兩岸十一町歩に亘つて昭和十五年の春からチューリップ、睡蓮、



川口善光寺

其の他草花いろ／＼の「お花畑新名所」が生れた。これは兩岸の荒蕪地に、足立産業會館が区内の園藝組合を動員して耕作したもので、やがては四季折々の紅紫黄白が咲く筈で、開園に當りまづチューリップ球根五百萬個が美しい花を見せた。十一町歩に咲いた草花を眺めて歩くのも一興だが、一本二本欲しい人には市價よりも安く頒けてもらへる。

川口善光寺

ら有名な鹿濱の虫切は、花の名所荒川堤の土手際にある。王電バスに乗り江北橋を渡つて荒川土手で降り、堤の櫻並木に沿ふて舊川口街道を行くこと約七八丁、駄菓子屋を兼ねた休み茶屋の前からダラ／＼土手を下りた右に金比羅様を祭つた祠がある。古く天明年代の建立とい



ふだけで土地には記録も残つて居ない。其の祠の左手に構へた見るからに地主風な門構への家が、虫切の祈禱所である。當主の小宮氏は五代目の由で代々家傳の虫切を繼いで居る。遠く神奈川、横濱あたりから虫切りに来る人のあることからみても此處の效驗の程が偲ばれ、そればかりか此處の家の門をくぐつただけでも虫切の功德があるとさへ言はれて居る。門前には白南天で造つた、はしかの魔除けや、虫歯除けの玩具を賣る茶店もあつて、それらしい風趣を添へて居る。

荒川堤の草の香を慕ひながら愛兒健やかなれとひたすらな親心、虫切を念願する親達の思ひは同じ笑顔一つに道連れとなり、心安さに嬉々とした行人姿、此處の風景は今も昔も變りなくなごやかに長閑である。

昭和十五年十月五日印刷
昭和十五年十月十日發行

内案京東部北の味趣

定價 七拾八錢

編輯者	王子電氣軌道株式會社 小川宮次
發行者	東京市神田區錦町二丁目十六番地 三樹退三
印刷者	東京市下谷區二長町一番地 井上源之丞
印刷所	東京市下谷區二長町一番地 凸版印刷株式會社
發行所	東京市神田區錦町一丁目 〔振替口座東京四九九一番〕株式會社 明治書院
電話	電話神田 (25) 二二二四 二二二四 四八七番 四九八番

405
408

終

